

〈協同のひろば〉

「平和」と「協同」に高い関心

—第1回PCJF賞の贈呈にかかわって—

岩垂 弘 (埼玉県/PCJF代表運営委員)

とにかく、ホッとしている。平和・協同ジャーナリスト基金(PCJF)賞の第1回贈呈をなんとかやり終えたからである。

平和・協同ジャーナリスト基金(PCJF)賞と言っても、そりゃ何だい、と頭をかしげる方も多いに違いない。なにしろ、まだ誕生まもないファンドだから。そこで、まずこの基金がスタートするまでのいきさつから紹介したい。

1年前の95年3月末のことだ。私は親しい友人や同僚と一緒に飲む機会があった。その時、私は約1カ月後に定年退職を控えていたが、席上、友人の一人が「あなたがこれまでカバーしてきた分野の取材はどうなるのか」と切り出した。私がそれまで新聞社に勤め、主として平和運動や、生活協同組合や労働者協同組合などの協同組合運動の取材を続けてきたから、そうした質問が出たのだろうと思う。

私は「私がやめても、その方面をカバーする記者がいるから心配ないよ」と答えたが、こうしたやりとりがきっかけとなって、ひとしきり、平和運動や協同組合運動に対するジャーナリズムの対応について話はずんだ。そして、なんととはなしに到達した結論は「平和と協同の問題はこれからの世界と日本を考える上で極めて重要な問題、いや不可欠の問題と言っていいにもかかわらず、現実にはこれらの問題に関心をもつジャーナリストは極めて少ない」というものだった。

酒席での雑談はえてしてその時だけで雲散霧消してしまうものだが、私の友人や同僚たちは違っていた。「それなら、平和問題や協同組合運動に関心を示すジャーナリストをもっと育てよう」「育てるといふ言い方が傲慢ならば、市民の側からそうしたジャーナリストを励まし、支援していこうではないか」という方向へ急速に具体化していった。中心になったのは弁護士、団体職員、会社員、

出版社員、写真家ら11人である。私もこれに加わった。

5カ月後の95年8月には、各分野で活動する72人に設立発起人(代表設立発起人は中坊公平・元日本弁護士連合会会長、中林貞男・元日本生活協同組合連合会会長、白井厚・慶応大教授ら6人)になっていただき、平和・協同ジャーナリスト基金(PCJF)が発足した。その運営については言い出しっぺの11人で構成する運営委員会が責任をもつことにした。

とりあえずは、反核・平和や協同組合運動に関する報道に寄与したジャーナリストらに年1回、基金賞を贈って顕彰しようということになった。基金にはだれでも加入でき、その運営は加入者からの寄金(1口1000円とし、何口でも受け付ける)でまかなうこととした。いわゆる協同組合的な方式を取り入れ、加入者(会員)は、基金賞選定にあたって候補作品の推薦権をもつこととした。

運営委でまず議論になったのは、最初の顕彰をいつ行うかだった。1年後にという意見もあったものの、「戦後50年、被爆50年の95年に第1回をやるべきだ」という意見が大勢を占めた。このため、発足早々から運営委メンバーは授賞候補作品の収集と寄金集めに追われた。候補作品は公募したほか、会員に推薦を依頼した。その結果、11月までに56点が集まった。平和関係39点、協同関係9点、映像関係8点という内訳であった。寄金は219人から360万円に達した。中には、1人で100万円を出してくださった方があり、これが寄金総額を押し上げた。

基金賞の選考は、運営委が委嘱した7人の選考委員と運営委メンバーによって行われた。7人は大谷正夫(日本生活協同組合連合会常勤参与)、菅野正純(協同総合研究所副理事長)、鈴木みどり(立命館大教授、テレビ評論家)、坪井主税(札幌学院

大助教授)、原一男(映画監督)、前田哲男(東京国際大教授、軍事評論家)、由井晶子(沖縄タイムス論説顧問)の各氏だ。

集まった作品は力作ぞろいだった。優劣をつけがたく、選考作業は長時間に及んだ。国民各層に「平和」と「協同」に対する関心が広がりつつあることがうかがえた。

選考の結果は、以下の通りだった(敬称略)。

☆基金賞(2点)

▽フォト・ジャーナリスト、豊崎博光(神奈川県)「アトミック・エイジ」(築地書館)

▽NHK長崎放送局・NHK福岡放送局「NHKスペシャル『長崎 映像の証言～よみがえる115枚のネガ～』」(95年8月9日放映)

☆基金賞奨励賞(6点)

▽写真家、石川真生(沖縄県)「沖縄と自衛隊」(高文研)

▽書家・作家、上原順子(三重県)「反核・平和に関する短歌、小説など」

▽栗原淑江(東京都)「自分史つうしん ヒバクシャ」

▽神戸医療生活協同組合(神戸市)「おまえらもはよ逃げてくれ—阪神大震災 神戸医療生協の活動記録」

▽中国新聞労働組合(広島市)「ヒロシマ新聞」

▽ルポライター、西野留美子(東京都)「日本軍『従軍慰安婦』を追って」(マスコミ情報センター)

賞金は基金賞が各30万円、奨励賞が各10万円である。受賞者・団体を招いての贈呈式は12月6日夜、東京・新宿区の日本青年館で行った。その模様は新聞、テレビ、業界紙などによって報道された。いずれも好意的な扱いだったが、12月13日付の夕刊フジの「マスコミINSIDE」は「日本新聞協会賞、ポーン賞、大宅壮一ノンフィクション賞など、毎年、優秀な報道やジャーナリストを顕彰する賞はいくつかある」が、(これは)会員の寄金によって毎年、平和と協同に関する優れた

記事や作品を表したジャーナリストや作者を顕彰しようというもの。いわば、一般市民がジャーナリストたちを顕彰するわが国初の「市民賞、である」と伝えた。賞の性格を実に的確に表現した報道だった。

会場では、受賞者からあいさつがあったが、西野留美子さんは「取材費がなくて、全集の本を売ったり、ピアノを売ったり、ついに家を売ったりと、ほとんど賭けてきましたから、受賞はほんとうにうれしいです。大きな励ましになります」と述べた。神戸医療生協を代表してあいさつした上田耕蔵・神戸協同病院院長は「阪神大震災では高齢者と低所得者がえらい目にあった。医療という狭い範囲にとどまらず、どないしたら住民の暮らしや福祉に貢献できるかを模索している。今回の賞はそれへの励ましです」と述べた。

運営委メンバーからは「賞を創設してよかった」という声ももれた。12月末には運営委員会が開かれ、第1回授賞の総括をしたが、「成功と見ていいのではないか」という意見が多く、96年以降も引き続き基金賞の贈呈を行うことを申し合わせた。ただ、そこで問題になったのは、それに要する資金をどうやって集めていくか、ということだった。今は、超低金利の時代。お金を集め、その金利で基金を運営していくのはとても無理。そこで、基金のスタートにあたっては「当面、基金本体を使い、なくなればまた募る方式で運営します」と訴えて、協力を仰いだ。

そんなこともあって、運営委は引き続き会員の拡大(ということは寄金集め)に努め、さらに資金集めのための事業にも挑戦することを確認した。1月末現在の会員数は269人・団体である。さらに多くの方が加わってくださるようお願いしたい。

連絡先: 平和・協同ジャーナリスト基金(PCJF)

〒160 京都新宿区霞岳町15 日本青年館内

日本青年団協議会気付

TEL・FAX 03(3475)2495

郵便振替口座 00110—8—651888